

答え合わせ・解説

問1	答え 2 高台移転	大規模な津波被害を受けた地域では、再び同じような被害に遭わないよう、居住エリアを意図的に標高の高い場所（丘陵地など）へ移設する「高台移転」が進められました。これにより、海岸付近は公園や産業用地として活用し、住民の安全を確保する新しい都市構造が形成されています。
問2	答え 1 親潮	北から流れてくるこの海流は、千島列島に沿って南下するため「千島海流」とも呼ばれます。日本の北東部に位置する太平洋側を流れる代表的な寒流です。対して、南から北上してくる暖流は黒潮（日本海流）と呼ばれます。
問3	答え 3 ハザードマップ	大雨による河川の氾濫や土砂災害、地震といった自然災害の被害を予測し、視覚的にまとめた地図はハザードマップと呼ばれます。これには避難場所や避難経路などの防災情報が掲載されており、住民が迅速かつ安全に避難行動をとれるよう自治体によって作成されています。
問4	答え 3 フォッサマグナ	日本列島を地質学的に東西に分ける巨大な溝状の地帯を指します。ドイツの地質学者ナウマンによって命名されました。九州南部に広がる火山灰の台地であるシラス台地とは、その成因も場所も異なります。
問5	答え 4 親潮（千島海流）	北海道や東北地方の太平洋側を千島列島沿いに南下してくる寒流は親潮（千島海流）と呼ばれます。この海流はプランクトンを豊富に含んでおり、三陸沖で暖流の黒潮とぶつかります。リマン海流は日本海側を南下する寒流、対馬海流は日本海側を北上する暖流です。
問6	答え 1 火山の爆発や噴火によって、山体の一部が陥没したり崩壊したりして形成された。	カルデラは、マグマの噴出によって地下にできた空洞に地表面が落ち込む「陥没」などの火山活動によって作られます。他の選択肢については、火山灰が降り積もったものは「シラス台地」、河口の堆積地は「三角州」、山地から平地への出口に見られるものは「扇状地」であり、形成過程が全く異なります。
問7	答え 2 北から流れる親潮（千島海流）は栄養分が豊富で、南から流れる黒潮（日本海流）とぶつかる潮境では好漁場が形成される。	日本の太平洋側を南下する寒流は親潮（千島海流）であり、魚を育てる親のような役割を持つほど栄養分が豊富であることからその名がついています。一方、北上する暖流は黒潮（日本海流）です。この二つの海流がぶつかる地点は「潮境（潮目）」と呼ばれ、プランクトンの発生とともに多くの魚が集まる好漁場となります。対馬海流やリマン海流は日本海側を流れる海流です。
問8	答え 3 ヒートアイランド現象	周辺部と比較して、都市の中心部の気温が統計的に高く現れる現象を「熱の島」に見立ててヒートアイランド現象と呼びます。特に夜間の最低気温が下がりにくくなるのが特徴で、東京などの大都市では都心部を中心に熱帯夜の日数が増える傾向が顕著に現れます。
問9	答え 1 対馬海流	日本海側では、冬にシベリア高気圧から吹き出す冷たく乾燥した北西の季節風が、比較的温暖な海流の上を通過する際に大量の水蒸気を蓄えます。この湿った空気が奥羽山脈や三国山脈などの山々にぶつかって上昇し、雪雲を発達させることで世界的な多雪地帯を作り出しています。選択肢にある日本海流（黒潮）は太平洋側を流れる暖流、リマン海流は日本海を南下する寒流、千島海流（親潮）は太平洋側を南下する寒流です。
問10	答え 4 三角州	長良川、木曽川、揖斐川が合流する木曽三川の河口付近にある広大な平野は、典型的な三角州の性質を持っています。このような場所は地盤が柔らかく、水分を多く含むため、都市開発においては地盤沈下や洪水への対策が重要視される土地柄です。山地に近い「扇状地」との場所の違いを理解することが重要です。
問11	答え 3 太平洋から吹く湿った空気が山脈にぶつかって上昇することで、太平洋側に雨を降らせ、山を越えた後は乾燥した風となる。	日本の夏は、太平洋側にある高気圧（小笠原高気圧）から湿った風が吹き込みます。この風が日本列島の中央にある山脈にぶつかると、上昇気流が発生して雲ができ、太平洋側に降水をもたらします。水分を放出した後の風は、山を越えて日本海側へ吹き下ろす際には乾燥した状態になります。冬に日本海側から吹く季節風とは逆のメカニズムです。
問12	答え 2 冬でも気温が温暖に保たれるため、高知県や静岡県などで果樹栽培や野菜の促成栽培が行われている。	日本海流は多量の熱を運ぶ暖流であるため、沿岸部では冬の気温が下がりにくくなります。この温暖な気候を利用して、高知県（土佐平野）や静岡県などでは、他の地域よりも早く野菜を出荷する促成栽培や、ミカンなどの果樹栽培が発達しました。夏に冷害をもたらすのは寒流の親潮（千島海流）の影響です。
問13	答え 3 大雨などの際に斜面崩壊が発生する危険性が高い場所を事前に周知し、迅速な避難行動を促すため	土砂災害ハザードマップに示される「警戒区域」は、土砂災害防止法に基づいて指定されます。急傾斜地の崩壊（がけ崩れ）、土石流、地滑りといったリスクを地図上で可視化することで、災害発生時に住民がどの方向に避難すべきか、また日頃からどの程度の危険があるかを認識させることが大きな目的です。
問14	答え 1 土砂災害	地形図で等高線の間隔が狭い場所は傾斜が急であることを示しています。このような場所では、大雨や地震によって山くずれや地すべりなどの土砂災害が発生しやすくなります。